

教師の聴く力に関する考察

A Consideration on the listening Ability by Teacher.

高 賢一
Kenichi TAKA

〈要旨〉

私は、これまで長らく公立中学校・公立高校の教員として勤務し、そして現在は、大学の教員として教育・研究に携わると共に、学生相談センター長として学生や教職員のカウンセリング、加えて地域貢献の一環として公立中学校・公立高校のスクールカウンセラーにも取り組んでいる。滋賀県大津市内の中学生の、いじめによる自殺と思われる事件（大津事件と呼ぶことにする）が、大きな教育問題として取り上げられた。この事件を契機として、いじめの被害者である子どもや保護者が口火を切り、堰を切ったかのように全国各地で深刻ないじめの実態が明らかになってきた。決して風通しが良いとは言えない学校現場や教育委員会に警察が踏み込んだ事実は、学校現場や教育行政などにさまざまな問題を提起しているように思われる。私の中学・高校教員の経験、スクールカウンセラー経験等を通して、本当に教師は子どもの話を聴いているのかを検討すると共に、教師の聴く力について考察する。

〈キーワード〉

大津事件、いじめ自殺、聴く力、学校カウンセリング

1. はじめに

大津事件を契機に、堰を切ったかのように全国各地で深刻ないじめの実態が明らかになってきた。決して風通しが良いとは言えない学校現場や教育委員会に警察が踏み込んだ事実は、誰にも理解してもらえないことに絶望感を抱いていた、いじめの被害者である子どもや保護者を勇気づける形になった。

大津事件は、学校現場や教育行政機関に大きな問題を提起したものと思われる。学校や教育委員会の隠ぺい体質が指摘されたが、これはいじめや不登校などの問題が少ない学校が高く評価されたり、そうした問題を多く抱えた学校が低く評価されるなど、学校評価の問題と連動しているように思われる。

文部科学省は、いじめの問題と学校評価の問題が連動していることに着目したのか、たとえ学校にいじめ問題があっても、いじめを早期に発見し、その解決に向けて積極的に取り組んだ教師や学校を評価するよう各都道府県の教育委員会に異例の通達を出したようである。こうした文部科学省の新しい積極的な取り組みは、これまで見られなかった画期的なものといえよう。

大津事件を契機として、私自身の反省も含めて我々教師は、多忙を口実にしながら本当に子どもの話を聴いているのかという疑問が沸々と湧いてくるのである。これまでの

私の中学校・高校の現場教員経験、またスクールカウンセラーという立場を通して学校現場を見てみると、反省の余地が十分あるように思われる。教師の並々ならぬ努力の一方で、子どもが熱心に教師に話をしているのに、その話を受ける教師が必ずしも聴いていないことがあるということである。

2. 子どもとの会話で教師が陥りやすい問題点

1点目は、我々教師が、子どもの話をちゃんと聴いているかどうかという疑問である。たとえば、子どもが職員室に入ってきて、「先生、あのう・・・」と言って担任に声を絞り出そうとしている時に、同僚との会話に花が咲いているために、「悪いけど、後にしてくれないか」と担任が答えたとする。もちろん、いつもこのようなわけではないものの、こういう場面では、子どもはどのように感じるだろうか？いじめられて死を覚悟しながら担任に相談にきたのかもしれない。もし、このような時に子どもの話をしっかり聴いてあげることができたら、極端かもしれないが、いじめを苦しめた自殺に至らなかったケースもあったかもしれない。確かに教師も生身の人間ではあるが、それだけ教師の言動が子どもたちに大きな影響を及ぼすものであるということを再認識する必要がある。

2点目は、教師が、子どもの話を遮ることはないかとい

う疑問である。子どもが熱心に友達なんかの話をしている途中に、教師が「おい、ちゃんと家で勉強しているか？」などと、場違いの質問をして子どもの話を遮ってしまうことがある。「ちゃんとやっていますよ」と不満げに答えたかと思ったら、とても気分を悪くして教師の前から立ち去ってしまったのである。「先生、どうして私の話を最後まで聞いてくれないのですか？」というつぶやきが聞こえてくるようである。

3点目は、教師が、いきなり指導の視点を変えることはないかという疑問である。子どもが、「先生、ちゃんと予習してきたよ」と嬉しそうに伝えるが、教師は、「復習も大切だよ」と答える。先生が言った通りに予習してきたことを伝えているのに、教師は、突然指導の視点を変更して、「復習も大切だ」と強調している。「そうか、先生の言う通りに予習してきたんだね。よく頑張ったね」という言葉が欲しかったのであろう。

4点目は、教師が、子どもの努力をちゃんと認めているかどうかという疑問である。普段はあまり勉強しない子どもが、「先生、昨日は2時間も勉強したよ」と嬉しそうに教師に伝えるが、教師は、「そんなの当たり前だろう。中学3年生なんだから」と答える。子どもは、教師の言葉をどのように感じたのだろうか？ その子どもは、「先生は、私の努力なんか無視なんですね」という捨てぜりふを吐いて職員室を出ていったのである。「そうか、よくやったなあ。やればできるじゃないか」という励ましの言葉が欲しかったのではなかろうか。

5点目は、教師特有の説教が子どもの指導に効果を発揮することもあるが、それが子どもの心をますます閉じさせたり、追い詰めていないかという疑問である。「先生、やっぱりうまくいきませんでした」と子どもが話しかけてきた時に、「だから、そういっただろう。先生の言うことをちゃんと聞かないからそうなるんだよ」と答えたとする。その時の子どもの気持ちはどうだろうか？ 相手は大人ではなく子どもであるという甘えや気負いがあるせいかな、ついつい説教してしまうことが多い。「そうか、うまくいかなかったか。本当に残念だったねえ。次からは、今回の失敗経験を十分生かしてがんばろうね」と言って欲しかったのではなかろうか。

3. 子どもたちが寄りつく教師から学ぶこと

いつも子どもたちが群がって寄りつく教師がいる一方で、あまり寄りつかない教師もいる。これまでの私の長い教師経験から、子どもが寄りついていく教師には何か共通点があるような気がする。たとえば、えこひいきしない教師、時には厳しく穏やかで優しい教師、先入観や偏見を持たない教師、態度が一貫している教師、子どもの興味を引

き出す教師、熱心な教師などである。その一つに、聞き上手な教師があげられるが、子どもの話を実によく聴いている。どのように聴いているのだろうか？

1点目は、子どもの話をとにかく最後まで聴こうとしているのである。子どもの話は省略が多く、主観的で、感情的で、表現も未熟なことが多いので、子どもの話を聴くにはかなりの忍耐が必要である。多忙な教師にとっては、時間の浪費のように思われることもある。そのため、ついつい「早く結論を言いなさい」「要するに何を言いたいんだ」などの言葉が出てしまう。とりわけ、話し下手な子どもは、口ごもったり、話がそれてしまうなど、一体何を言おうとしているのか、はっきりしないことがある。それでも、忍耐強く最後まで子どもの話を聴こうとしている。子どもは、最後まで話を聴いてくれた教師に感謝の気持ちや親近感・信頼感を抱くようになるのである。

2点目は、子どもの話を否定的に聞かず、肯定的に聴こうとしていることである。子どもの話がたわいのない世間話で、つじつまの合わない非現実的なものでも、頭から否定しないで最後まで聴こうとしている。些細な矛盾にとらわれず、揚げ足をとったり、間違いを責めたりすることなく、子どもの話を真つすぐに聴こうとしている。そうすると、子どもは嬉しそうに教師に聴いてもらおうと懸命に話しかけてくるのである。

3点目は、子どもの話に素早く反応していることである。「なるほどねえ」と相づちを打ったり、「それはすごいことだねえ」と感心したり、「それでどうしたのかな？」と先の話の促したり、「それはどういうことなのかな？」と質問するなど、話をはずませるような聴き方をしているのである。ただし、反応のタイミングを間違えると、話の腰を折るなどのミスマッチが起こりやすいので留意する必要がある。

4点目は、子どもの話を忍耐強く最後まで聴くのは辛いことではあるが、その辛さを軽減するために、話の内容と共に、子どもの内側に流れる感情を聴くようにしていることである。教師は、子どもが何を言いたいのか把握しようとするあまり、話の内容だけにとらわれる傾向がある。子どもが何かを発見した驚きや喜びを伝えようとしているのか、教師に甘えようとしているのか、いじめられている苦しさを訴えたいのか、あるいは家庭での悲しみや辛さを聴いてもらいたいのか、話の内容もさることながら、子どもの感情を聴くようにすると、やさしい気持ちになることができる。

他にも子どもが寄りつく教師の共通点があると思われるが、教師として言いたいことを抑え、子どもの話を最後まで聴いた上で、教師の感想やコメントを伝えることが大切であることに気づかされる。子どもは、自分の話をよく聴

いてくれる教師を好きになるようであるが、子どもに迎合するような教師が好まれるかというところでもない。子どもの話をしっかり聴くことは大切なことではあるが、善悪の判断に関わることやきちんと指導すべきことなどについては、毅然とした態度で臨む教師が好まれる。このように、メリハリのある教師が子どもたちにより好まれるということである。

4. 子どもの話を聴く効果について

教えることが好きなので、あるいは子どもが好きなので教師になったという人が多いと思われる。教師は、子どもの顔を見ると教えたくなるのが一般的であろう。確かにそれが仕事ではあるが、教えることには、「伝えること」と「引き出すこと」があると考えられる。教え好きの教師は、「伝えること」が「教えること」であると思ひ込み、くどくど説明したり、ついつい説教口調になってしまうのである。教え好きが昂じて、子どもの話を聴こうとしなくなる傾向がある。

教育は、教育する側（教師）の一方的な考えや方法で進めるものではなく、教育される子どもの考えも十分聞きながら進めるというのが一般的になってきた。子どもたちは、自分たちの話を教師に聴いてもらいたいと思っている。

一方、教師としても、子どもの話を聴く必要に迫られている。なぜならば、子どもの話を聴くことは、子どもの指導に大きな効果のあることが分かってきたからである。そこで、私の長い教師生活や多大なエネルギーを費やした教育相談活動を通して、子どもの話を聴くことにどのような効果があるのか整理してみたい。

1点目は、子どもの話を聴くことで、子どもの考え方・感じ方・見方・行動・要求・意見などを知ることができるし、子どもの理解が深まることである。子どもは、大人とは違った考え方や行動をとることがあり、子どもの話を聴くことで、子どもの指導に情報を取り入れることができるのである。

2点目は、教師が子どもの話をよく聴いてあげることで、「自分を理解してもらえた」「自分は大切にされている」などと、子どもの自己肯定感や自尊感情が高まることである。先進国の比較調査でも明らかなように、日本の子どもたちは、「自分はだめな人間である」「自分には価値がない」などと自己肯定感が低く、精神的に満たされていない不満感が強い傾向にある。また、心に葛藤を抱えた子どもたちが増えているように思われる。

3点目は、子どもは、自分の話をよく聴いてくれる教師を期待し、そのような教師を好きになり、教師の話に耳を傾け、信頼するようになることである。子どもに信頼される教師の力として、「子どもを指導する力」などがあげら

れようが、近年、「子どもの話を聴く力」もそれと並ぶようになってきている。子どもの話をよく聴くことで、子どもと仲良くなれたり、子どもをよく理解することができよう。

このように、子どもの話を聴く時は、最後まで受容的に聴くことが大切であり、そのうえで自分の思想や感情と対話することが望ましいといえよう。子どもの話を聴くことは、外からの刺激、感覚、感情や思想などを教師の内部に消化することができる。教師は、そのことによって自らを再創造することになる。

しかし、教師の場合、子どもの話を聴く時、子どもの話を自らの再創造に役立つものととらえているだろうか？「子どもの話なんか」などと、最初から軽視する教師がいるとしたら、それは教師のおごりというものである。確かに、子どもの話には嘘もあるし、間違っていることもある。それを指導するのが教師の大切な役割なのかもしれないが、とにかく子どもの話を聴くだけ聴いたうえで、自らの心の内にて対話することが重要である。

5. 教師の「聴く力」を伸ばすために

子どもとの会話で教師が陥りやすい問題点、子どもたちが寄りつく教師から学ぶこと、子どもの話を聴く効果について考察してみたが、それを踏まえて教師の「聴く力」をいかに伸ばすかについて考えてみたい。

子どもの話をちゃんと聞けないと、子どもの気分、興味・関心や要求、喜怒哀楽などを理解することはできない。

子どもの理解ができないと教育は成立しなくなり、教師の独り善がりになってしまう。聴く力は教師の力量であるから、自然に聴き上手になるというわけではない。自分の中に育てていこうと努力しなければ、こうした力量は身につかない。聴く力を身につけるためには時間がかかるが、こうした力を身につけるためにはどのような要件が必要なのか、考えてみたい。

1点目は、子どもの話、言動、表情やしぐさなどから、子どもが何を考えているのか、何を望んでいるのか、どうして欲しいと思っているのかなどを推論する力、つまり想像力を培うことである。たとえば、ふだんよりも何となく落ち着きがなく、顔色も冴えない子どもがいたとしたら、「テストが近づいているので不安なのかな」と想像してみる。実際に子どもに聞いてみないとわからないものの、その推量が的確で、子どもの気持ちが理解できれば、わざわざ子どもに聞かなくても柔軟に対応できることもある。教師の想像力を高めることは、教師の指導力を向上させるばかりではなく、話し下手な子どもの気持ちも推量できるようになる。

2点目は、世間話を上手に聴くことである。教師は、世間の人と話をする時、横柄な口調になりがちである。その

理由として、子どもを指導する立場にあること、世間の人と対等に交わる機会が少ないことがあげられる。もちろん、保護者（世間の人）と話す機会はあるものの、保護者は一般的に教師に対して世間の人と区別して話す傾向がある。なぜならば、わが子を人質にとられているような感覚があるため、教師と対等な感覚を持っていないからである。したがって、教師はできるだけ世間一般の人と接し、楽しい世間話ができるようになればと期待するところである。

3点目は、教師が子どもに対して「なんだ、その口のきき方は」などと注意したり、叱ったりすることがあるが、本当に子どもが悪いのか、よく考えてみることである。教師が投げかけた言葉が良くなかったために、子どもが良くない言葉で返してきたのかもしれない。もしそうだとしたら、教師は子どもが投げかけてきた言葉の真意を理解する必要がある。ただ単に表面的に、感情的に受け取らないで、その背景にあるものを理解しようと努力することによって、子どもの話を聴く力を伸ばすことになるといえよう。

4点目は、子どもとの会話の中で起こる沈黙に立ち向かうことである。沈黙が続くと、ついつい教師は多忙さにかこつけて、あるいは沈黙の怖さに打ち勝てず、自ら口火を切ってしまうことがある。この沈黙には、とても重要な意味があることを認識する必要がある。一口に沈黙といっても、何をどう言ってよいか考えている沈黙、言っていないかどうか迷っている沈黙、自分の心の中を整理している沈黙、話が一段落してほっとしている沈黙、教師に対して拒否的な沈黙などが考えられる。

教師は、こうした重苦しい、息苦しい沈黙に耐え切れず焦りがちになる。子どもに何とか話させようと、いろいろな質問をしたり、沈黙が続くため無駄な時間を過ごしたくないなどと、子どもを批判しても話は進展しない。言葉はなくて、子どもの動作・表情などから、子どもの気持ちや感情はかなり理解できるものである。沈黙の意味を懸命に

理解しようとする教師に対して、沈黙を共有し、共に考えてくれた教師に親近感を抱き、以後の話がスムーズに進むことが多い。

5点目は、子どもと雑談をすることである。子どもが一番聴いてもらいたいのは親や友人であると思われるが、そうだとすると、教師は子どもたちの仲間づくりを支援し、その友人関係の質を引き上げ、悩みを語り合える関係に高めるように励ますことであろう。一緒にいる友達、一緒に行動する友達、お互いに注意し合える友達、悩みを打ち明ける友達など、その段階によって関係が異なってくる。友達とは何か、どういう友達が親友なのか、そういうプロセスを経て、教師は子どもたちの仲間づくりを支援するのが望ましいと思われる。

子どもが聴き上手になればそれに越したことはないが、まずは教師が聴き上手になることであろう。教師が子どもの話を聴くためには、まず雑談から始めるとスムーズに進むことが多い。雑談の良いところは、始業前、休み時間、給食の時間、掃除の時間、放課後など、時間や場所を選ばなくてもいいことである。そうした時間を活用して、ひたすら子どもの話を聴いてみる。子どもには説教はできるが、雑談のできない教師が増えているといわれる。雑談の苦手な教師は、子どもたちと対話をしようと構えるのではなく、子どもの話を聴くことから始めればいいのである。

6. おわりに

本稿では、私自身の教師経験の反省を含めて、教師の聴く力について考察してみたが、決して教師批判をしているわけではない。教師の日々の格闘や努力に敬意を表するものであるが、より工夫を重ねることにより、子どもたちの話により耳を傾けるようになったり、子どもたちをより理解できるようになるのではないかと期待するものである。

参考文献

1. 阿川佐和子著『聞く力』（文藝春秋、2012年）
2. 東山紘久著『プロカウンセラーの聞く技術』（創元社、2012年）
3. 伊藤進著『聴く力を鍛える』（講談社現代新書、2008年）
4. 養老孟司著『人の話を「聴く」技術』（宝島社、2006年）
5. 片山一行著『いつの間にか相手の心をつかむすごい聞き方』（ダイヤモンド社、2009年）
6. 小林正幸編著『教育カウンセリング』（川島書店、2000年）
7. 多田孝志著『授業で育てる対話力』（教育出版、2012年）
8. 高野利雄著『やさしい教師学による対応法』（ほんの森出版、2005年）
9. 神谷和宏著『教師のほめ方叱り方コーチング』（学陽書房、2010年）
10. 高賢一著『教育支援センターから再出発する子どもたち』（生徒指導学研究第7号、2008年）